

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01221

研究課題名(和文)先住民の出稼ぎ労働をめぐる国際移動・国内移動

研究課題名(英文) International and Internal Migration of Labor: A Study on the Indigenous Peoples of the Philippines as Agricultural Migrant Workers.

研究代表者

森谷 裕美子 (MORIYA, Yumiko)

跡見学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：40221709

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：長年、低地民に差別・抑圧されてきたフィリピンの先住民が日本で農業実習生として働くようになり、彼らのコミュニティでは、大規模な農業経営で経済状況を改善させた先住民たちがそこに低地民を雇うという社会関係の逆転が起きていた。彼らの農業実習生としての生活も、何かと負の面が強調されがちな実習制度のもと、そのほとんどは問題なく過ごしており、その要因は主な受入先である地域が送出国との良好な関係を長年に亘って培ってきたからで、こうした受入を推進することが双方にとって有益であることがわかる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまであまり言及されていなかった、発展途上国での国内移動がグローバル化の進展によって地域社会に及ぼす影響、及び「家族のために犠牲になって働く無力で受け身の存在」としてステレオタイプ的に表象されることの多い移民労働者の実態について、それが必ずしもそうとは限らないということをフィリピンの先住民の事例から明らかにした。

また本研究ではこうした国際移動労働の多様性が示されるとともに、受入側の問題として、受入国と事業参加者、送出国との間には「一過性ではなく地域社会を担う可能性ある人材として外国人材を受け入れる3者のトリプルウィンな農村事業の推進」が必要であることがフィリピンの先住民の事例から示された。

研究成果の概要(英文)：Indigenous people of the Philippines have been discriminated against and oppressed by the lowlanders. But they were able to improve their economic situation in large-scale farm managements with using the salary earned as Technical Intern Trainees in the Agriculture Sector in Japan. And they employ lowlanders as workers there. Then they become masters of lowlanders, and their social relations were reversed in their communities. Most of the indigenous people have been keeping out of trouble in Japan under the Foreign Technical Intern Training system. Because the people of their host area have built a good relationship with the people of the sending community over many years. This suggests that it is beneficial to build such a relationship in order to accept foreign technical intern for both sides.

研究分野：文化人類学

キーワード：国際移動 フィリピン 先住民 技能実習生

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、人文・社会科学では公共社会学、公共考古学、公共民俗学など「公共」の2文字を冠する新たな学問領域が生まれている。その中心的な人物であるプロノフスキーは「今日のジレンマを捉え直し、必ずしも解決に至らないとしても、それを軽減することに対して人類学者に何ができるかを人類学の専門外の人々にもわかるようなやり方で多岐にわたるさまざまな重大な課題に取り組む」公共人類学を提唱したが、日本においても近年、日本文化人類学会の学会誌で特集を組んだり、課題研究懇談会で公共人類学と関連する研究が行われたりしている。文化人類学が関わることのできる公共領域としては地方自治体・地域社会、国際機関、NGO・NPO、企業などが考えられるが、そこでは「社会問題を人類学者の立場から扱い、その理解を公共に促し、人類学の手法を公共に押し付けるのではなく使ってもらおう」という立場に立つことが必要だとされており、これによって人類学者は新たな公共性の構築に寄与することができるという。とりわけ日本では人口減少と高齢化が急速に進み、今後もその労働力不足を補う1つの方法としての外国人労働者の受け入れについて活発な議論がなされているが、そうした場においても人類学的な研究が応用できる。今や、日本人のみの構成メンバーを前提とした社会ではなく、外国人も地域社会の構成員として共に生きていく「多文化共生」の視点を新たに盛り込んだ地域づくりが必要とされており、こうした分野での公共人類学の可能性が期待されている。

### 2. 研究の目的

グローバル化が進み、世界中が相互に関係し合い地域と世界の境界が曖昧になりつつある現代社会では、これに伴い各地で発生しているさまざまな問題を解決する上で人文学・社会科学も何らかの貢献ができる、ないしは貢献すべきだとする意識が高まりつつある。こうした状況において、本研究では人の移動にかかわる「多文化共生」をめぐる問題を扱うが、とりわけ世界有数の移民送出国であるフィリピンからは日本にも多くの農業技能実習生が近年、送られてきており、そこには低地民から差別・抑圧化されてきた先住民が多く含まれている。そこで、そうした農業技能実習生のうち、特にルソン島北部山岳地帯の先住民を実習生として長年に亘って受け入れている団体に注目し、その団体と実習生の受け入れの実態、およびこの地域で見られる、先住民の下で働く低地民の生活状況についての現地調査を行うことで、先住民と低地民のそれぞれの移動にどのような問題や課題が見られるかを整理する。そして、これらの調査で得られた「知識」をもとに、在日労働者や移民送出国の人々に対する支援のあり方を公共人類学の立場から検討する。すなわち、そうした「知識」を必要とする人々にこれを提供することで「知識」と「実践」を繋いでいくことが本研究の主たる目的である。

### 3. 研究の方法

具体的には、文献資料と現地調査により(1)先住民の農業技能実習生の日本での生活・労働の実態についての明らかにし、(2)フィリピンの先住民の文化的背景と実習生の送り出し要因の2点に関する「知識」を関係する人々に提供することで地域社会における外国人と日本人との交流を進め、相互理解を促進させ、次に実践として、実際に現場で働く人々の意見を集約し、両者を繋ぐ実習生の受け入れ団体と一緒にその改善点を考え、研究者としてその成果を発信することで「文化を異にする人々どうしの共生」を考える多くの人々に公共人類学の研究の可能性を提起した。

### 4. 研究成果

研究の成果としては以下の5点があげられる。

(1) 世界有数の移民送出国であるフィリピンでは、移民労働者たちが「家族のために犠牲になって働く無力で受け身の存在」としてステレオタイプ的に表象されることが多かったが、彼らの国際移動の目的もその社会的背景も実際には大きく異なっており、フィリピンでもっとも社会的、文化的、経済的に周縁化される先住民の社会でも、中央から物理的にも社会的にも遠く離れた存在であるにもかかわらず、彼らが、自らの意思で自分たちの人生を切り開く主体となり、一つの生業戦略として国際移民労働を利用していることを明らかにすることで、国際移動労働の多様性を示した。

(2) 日本で農業労働者として働くフィリピン人、とりわけ厳しい自然環境の中で「伝統的」に農業を営んできた先住民の多くが今や日本に農業技能実習生として「出稼ぎ」に来ているが、彼らの多くは学歴や資格のない貧困に喘ぐ人々で、たまたま良い条件で働ける人的ネットワークや情報をもっていない限り、日本では、次なる飛躍のために耐え忍ぶことが必要であり、他のフィリピンの国際移民労働者と比べ、自由や権利をよこせと叫ぶことができるような状況にはまだ至っていないことが明らかになった。

(3) 国際移動労働者を大量に送出するとともに、多くの国民が国内移動の経験をもつフィリピンにおいて、比較的最近まで「伝統的な」生活を維持してきたとされる先住民社会でも近年では「社会的ネットワーク」を駆使して自らの生活向上を図るようになっており、彼らはグローバル

化によってもたらされた新しい状況にうまく適応するための試みとして社会的ネットワークやソーシャル・メディアを利用しており、それは生活の向上だけでなく、ディアスポラな状況におかれる彼らのアイデンティティと文化の崩壊にも対応するものとしても機能していることが明らかになった。

(4) これまで人の移動に関する研究では、送り出し国にとって、国際移動労働こそが国内の余剰労働力の調整と外貨獲得における最も効率的な方策のひとつであるとされてきたが、実際には、よりよい生活を求めての移動は、とりわけ発展途上国において国内移動が顕著であり、この国内移動がグローバル化の進展、とりわけ経済のグローバル化によって地域社会に大きな影響を及ぼすようになっており、近年では、政治的、社会的、文化的に阻害され周縁化されてきた先住民社会への低地民の国内移動が顕著にみられ、その結果、先住民と低地民との人間関係や「伝統的」な社会に大きな変容をもたらしつつあることから、その分析を通して経済のグローバル化がもたらす人の移動の別の側面を明らかにした。

(5) 日本では、人手不足が深刻化するなか、多くの外国人技能実習生が日本の産業や経済、地域社会を共に支える一員として働いているが、問題も多い。そのため本制度の見直しが行われてきたが、そこで考慮すべきこととして、その優良事例であるフィリピンの先住民を長年、農業技能実習生として受け入れてきた高知の事例をとりあげ、農業分野における外国人材の受け入れにおいては、すでに雇用する農家だけの問題ではなく、地域の基幹産業である農業を支える担い手として、また、地域で共に生活する者として地域全体で考えるべき問題になりつつあり、技能実習制度の見直しについては、外国人材を受け入れる日本・途上国・事業参加者3者の「トリプルウィン農村事業」となるよう考慮しなければならないことを指摘した。

今後の展望としては、なにかと負の側面が強調される技能実習制度において、必ずしもすべての実習生が困難な状況に置かれているわけではないという現状において、日本と送出国、実習生の現状やその背景について、今回は高知の事例だけを取り上げたが、他の優良事例の詳細な分析も含め、これを多方面から考察することを通して、今後のあり方を慎重に検討していかなければならないだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 森谷裕美子	4. 巻 22
2. 論文標題 農業分野の技能実習制度と高知で働くフィリピン先住民の関係性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学人文学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 16-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森谷裕美子	4. 巻 21
2. 論文標題 「フィリピンにおける社会的ネットワークと人の移動」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学人文学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 68-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森谷裕美子	4. 巻 58
2. 論文標題 「フィリピンの先住民社会における国内移動と文化変容」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 103-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森谷裕美子	4. 巻 20
2. 論文標題 「農業労働者としてのフィリピン先住民」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学人文学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 50 ~ 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森谷裕美子	4. 巻 19
2. 論文標題 「フィリピンの先住民と国際移動」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学人文学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 37～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------